



[京の街道とその周辺]

景 038 (H22) 歴 017 (H22)

鳥羽伏見の戦いから難を逃れたと伝わる大島邸は、建物の様式などから、江戸時代末期に建てられたと推定されています。

大島家は、伏見奉行所の与力を勤めていた大島家本家の分家で、明治の始め頃分家し当地の北に住んでいました。

京町通に面して建つ当建物は、当時の大島家分家の母屋の建つ敷地続きで、京町通に面して建つ3軒の町家のうち1軒で、母屋をはじめ、他の2家屋も今はなく、現在はこの家のみが残っています。

主屋は、瓦葺切妻平入のツシ2階建の町家で、京町通に下屋庇を張り出しています。

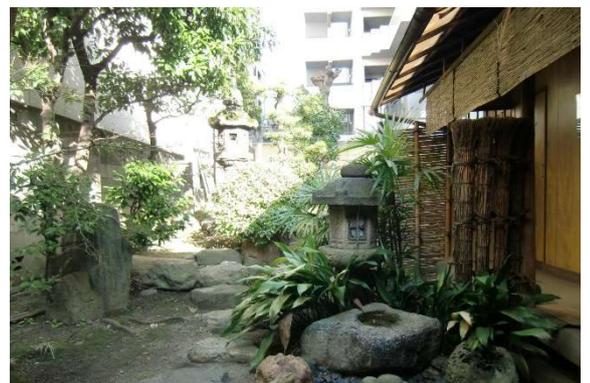
1階は引違い格子戸の出入口に平格子、格子窓、出格子と並ぶ珍しい形式で、下見板の腰壁と白漆喰の壁などで構成され、通庇は出桁造となっていますが、後世に何度か改修されており、特に、受け桁の先が短く切られているのは、戦前に道路巾を確保する為に行われたと伝わります。

2階は、4連の虫籠窓が付き、うち3連は土塗りの虫籠で、ひとつが木製出格子になっているのが、この建物の特徴です。

内部は、現状ではドマに沿った2列6間取りですが、大黒柱と土間梁の位置や現在でも奥まって井戸があることから、元は幅2間以上のドマであったと思われます。



座敷



庭敷座



〒612-8083 京都市伏見区京町3丁目179-4
※個人宅のため、通常非公開です。